

來りし所也、薑の如きは、ハジカミといふ、既に上世の時に聞えしを、倭名鈔にかくいひし事、其義如何にやあるらん、また倭名鈔に蜀椒をナルハジカミ、一にフサハジカミといひ、辛夷をヤマアラ、ギ、一にコブシハジカミ、と云ひ、蔓椒をイタチハジカミ、一にホソキといひ、吳茱萸をカハハジカミといふと註せり、古にハジカミといひし物、皆其味辛辣の物を云ひしなり、ハジカミといふ義も、蜀椒辛夷等の類を呼びし所のごときも、並に詳ならず、

〔倭訓栞中編十九〕はじかみ 薑をいふ神武天皇の歌にもよみたまへり、今子薑をはじかみ母薑をまやうがとするはいかゞ、齒蹙の義なり、辛辣の味をもていへり、新撰字鏡に椒を訓せり、倭名抄に生姜を吳のはじかみといふによれば、神武天皇のよませたまひしは山椒なるべしといふ説あり、主計式に越前國薑見えたり、神名式に波自加味神社あり、神宮雜例集に種姜を獻ること見え、江戸芝神明にまやうが祭といふあり、和名抄に薑をあなはじかみ蜀椒をなるはじかみとも、ふさはじかみとも、辛夷をこぶしはじかみ、吳茱萸をかははじかみと訓せり、新撰字鏡に、檄字をくまはじかみと訓せり、檄の誤なるべし、又秦椒をいだはじかみとも、茗はじかみともよめり、臭氣をいふ、

〔倭訓栞後編九〕しやうが 生姜をいふは、音の急語なるべし、姜吳音かう也、しやうが石は即薑石也、

〔古事記中神武〕然後將擊登美毘古之時、○中略歌曰、美都美都斯、久米能古良賀、加岐母登爾、宇惠志波、加美、久知比比久、和禮波和須禮士、宇知氏斯夜麻牟、

〔古事記傳十九〕宇惠志波之加美は所殖薑なり、薑は今もたゞ波士加美と云を、和名抄には、生薑は和名久禮乃波之加美俗云阿奈波之加美、乾薑和名保之波之加美と見え、字鏡には、干薑久禮乃波自加禰と見ゆ、これらに久禮乃と云るは、いかなる由にか、加賀國加賀郡波自加禰神社あり、乃波自加禰と見ゆ、これらに見ゆ、又大神宮四月十四日祭に、遠江神戸より進れる種薑を獻る神事あり、